

何ていう虫なんだろう？

みどりの森幼稚園（宮城県仙台市）

[5歳児]

園の南側にある木に毎年春先から初夏にかけて、青黒く光る甲虫をたくさん見つけることができる。子どもたちはその虫の色から愛称で「ギムムシ」と呼び、この虫の愛称は代々引き継がれ、子どもたちの間で呼び交わされている。またギムムシが多く見つかる木も「ギムムシの木」と呼ばれている。ギムムシの木には初夏から夏休みの初めにかけて、黒い幼虫がたくさん付いて、葉がほとんどなくなってしまう。

<ギムムシプロジェクト>

①ギムムシ
発見！

ムシコブ発見
食べるかな？

②アブラムシは
食べない

何を食
べるかな？

③図鑑にて…
「ヨモギハムシ」に似ている
「ハムシの仲間は葉を食べる」

⑤子どもが**お腹の大きいギムムシ**を発見したので、もう一度**実験**をする。この頃には少しずつギムムシの数は減ってきている。また、曇りの日や雨の日にはギムムシは見つけれず、晴れの日にだけ見つけることができた。子どもたちから「**ギムムシいないね**」「**今日は曇りだからだよ**」という会話も聞かれる。

数日後、葉っぱと一緒に虫かごに入れていた**ギムムシのお腹が、小さくなっていることを発見**し、葉っぱを見てみると、**黄色い卵が付いている。「木に付いているのと同じだ！」**「やっぱりギムムシの卵だったんだね」「あたためないのかなあ（卵を）」「じゃあ、あの卵は全部ギムムシの卵なの！？」と**ギムムシの木に付いている卵が、ギムムシのものだったことを、それぞれに実感し、喜ぶ。**

卵は、引き続き**観察**する。

ギムムシの葉に
卵発見！
ギムムシの卵か
確かめよう！

ヨモギとギムムシ
の葉を入れる
「ヨモギを食べる
かな？」

逃げてしまった！
再実験！

④ヨモギは
食べない

ヨモギハムシ
ではない

何ていう虫
なんだろう？



⑥卵がかえる
ちっちゃい！
育ててみよう！



子どもたちが飼育しているギムムシの幼虫の餌の葉を集めに行くと、ギムムシの木の葉がたくさん虫に食われていた。

葉を一枚採ってよく見てみると、卵からかえったギムムシの幼虫が、葉を食べていた。ギムムシの木の他の葉も見ると、幼虫の大きさは様々で、小さな黄色い幼虫の他に真っ黒い幼虫もいた。そこで「**ギムムシの幼虫はだんだん黒くなるんじゃない？**」という予測が立った。

⑦幼虫が黄→黒へ変化することを発見！

図鑑にて…
“コガタリハムシ”に似ている！
「ギシギシを食べる」
別の図鑑にて…
“ハンノキハムシ”に似ている！
「ハンノキを食べる」

⑧どうすれば正体が
わかるかな？

⑨ギムムシについてこれまで考えたこと、分かったことをクラス全体で共有し、**ギムムシの本当の名前を知るためにはどうすればよいかを話し合った。**コガタリハムシはギシギシを食べる、ヨモギハムシはヨモギを食べる、ギムムシはギムムシの木の葉を食べる。それならば、**ギムムシが食べている木の名前が分かたらギムムシの正体がわかるのではないか？**というところまで話し合いになった。

翌日にサイカチ沼に自然観察会へ出かけることになっていたの、子どもたちにとっての**山の先生**に、**ギムムシの木の葉を見せて、何の木か聞いてみることにした。**また、「**サイカチ沼にあるギムムシの木と同じ木にギムムシが付いていないか**」についても調べてみることにした。

『ギムムシ会議 I』

ギムムシの木は何だろう？

サイカチ
探検で、
山の先生
Oさんに
聞いてみ
よう！



サイカチ探検にて…



山の先生Oさん

これは
ハンノキだね！

子ども

ギンムシは
ハンノキハムシ
だったんだ!!

⑩サイカチ沼周辺の自然体験活動 園から持参した「ギンムシの木の葉」を見たOさんから「これはハンノキだよ」との答えが返ってきた。子どもたちからは「やっぱりハンノキハムシだね」という声が聞かれた。Oさんから「サイカチ沼にもたくさんハンノキがあるけど、おじさんはみんなに教えないからね。自分たちで探してごらん」と言われた。子どもたちは探して、ハンノキをたくさん見つけることができたが、サイカチ沼のハンノキにはハムシを見つけることができなかった。

ところが…

サイカチ沼ではギンムシはハンノキハムシだということになった。しかし、納得できないA男が家で図鑑を調べてきた。翌日、図鑑を見せながら、「やっぱりコガタリハムシに似てるよ！コガタリハムシだよ」という思いを主張した。

⑪保育者がA男の意見を他の子どもたちにも伝える。「ほくもコガタリハムシだと思う」という子が他にも出てくる。

B男は「ハンノキがギンギシと似ているから、コガタリハムシは間違えてハンノキを食べるんじゃない？」C男は「ギンムシはハンノキの葉っぱも、ギンギシの葉っぱも食べるんじゃない？」と言う。他にも様々な意見が出る。

そこで本当にハンノキとギンギシが似ているのか調べることになる。

また、A男から「同じ虫かごの中にギンギシの葉っぱと、ハンノキの葉っぱを入れて、ギンムシがどっちを食べるか実験すればいいんじゃない？」と提案があったので、ギンギシの葉を探して実験してみることにする。

『ギンムシ会議 II』

「僕もコガタリハムシだと思う」
ギンギシを調べてみよう！

協同の学びへ



⑫子どもたちは園の植物図鑑を広げ、まずギンギシがどんな葉っぱなのかを確認する。ギンギシのページをのぞき込んだ子どもたちは「ハンノキと全然違う！」「幼稚園の庭にあるかなあ？」と外に出て探し始めた。

図鑑を持ち歩き、園庭に生えている様々な草と照らし合わせていくと、庭の隅に生えていたギンギシを発見する。子どもたちは「これで実験できるね！」と嬉しそうに言う。

ギンギシとハンノキは
全然違う!!

『ギンムシ会議 III』

実験してみよう！
ギンムシはどれを食べるかな！？



ギンギシ ハンノキ ヨモギ

ギンムシはヨモギとギンギシを嫌がってる！

ハンノキだけ食べる！

やっぱり ギンムシは、
ハンノキハムシだった!!

まとめ <科学する心を育てるということ>

この活動によって、一部の子どもたちが行っていた虫探しという遊びが、個から協同の学びへと昇華していくプロセスを確認することができた。それは保育者が子どものもつ知の力を的確に見つけ出し、環境を整え、援助し、共に学びを深めていくことができたからではないだろうか。

虫を捕まえた時に抱いた「この虫が何の虫で、何を食べて生きているのか」という子どもの素朴な疑問を出発点として、毎日子どもたちは遊びながら疑問をもち、思考し、実験しそれを検証するという作業を行ってきた。

そのような知的好奇心の芽生えともとれる一連の活動（体験）のプロセスこそが、子どもにとって「学び」である。こうした体験を積み上げていく過程で、子どもと保育者が情報を交換し、互いに議論をし、かかわりを深めることを通して、個々の学びは協同の学びへと変遷を遂げていく。その過程の中で「科学する心」が育っていく。

ポイント

“ギンムシ”と呼ぶ身近な虫を、子どもたちが「知っている」ということではなく、「よく観る」活動になったことが大事な点です。虫の様子、卵、幼虫、餌、居場所、天気による様子の違いなど、どんどん観えてくることで、感じたり気付いたり、不思議や疑問を抱いたりしています。そして更に、興味深く観たり感じたりすることで考えたり予想したりしています。新たな疑問により「もっと知りたい」という意欲が高まり、豊かな協同的な学びに結び付きました。子どもの考えや解決への試行錯誤の様子から「科学する心」が育まれていることを捉えた保育者は、更に子どもの声に傾聴し、寄り添って環境を整えながら、子どもたちの探求を支える保育を展開しています。